

---

# **懺悔～ZANGE～**

伝次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

懺悔／ZANGER／

### 【Zコード】

N6925W

### 【作者名】

伝次郎

### 【あらすじ】

信一の誕生日を祝おうとアパートで準備をしていた景子は、信一が借りてきたいかがわしいDVDを発見する。些細なことでケンカになり、景子はアパートを飛び出す。すぐに帰ろうと思っていたが、見知らぬ男に拉致され、誘拐されてしまった。

景子の友人、由美に、犯人から電話が入る。景子の男を連れて来い、という内容だった。

景子を探すために奔走する信一と友人たち。犯人は誰なのか、景子は見つかるのか。調べていく内に、予想外の展開が待ち受けてい

た。

(一)

「違うよ、誤解だよ。見たかったわけじゃないんだ。本当だよ、信じてくれよ……」

「じゃ、何でこんな物がここにあるのよ。あなたが借りてきたんでしょ。見たかったんでしょ。白状しなさいよ……」

景子は立ち上ると、語気を強めて怒鳴りつけた。

「出来心だよ。俺、こんなもの借りるつもりじゃなかつたんだ。何か面白い映画でもないかと思って寄つてみたんだけど、つい……」

「だから見たかったんじゃないの。どうせ私じや物足りないわよね」「そんなに怒らなくともいいじゃないか。すぐ返してくれるか?」

信一は蛇に睨まれたカエルのよう、「タジタジ」としている。

「いいわよ。今から見ればいいじゃないの、それ。私は必要ないみたいね。それを見るんだつたら私は邪魔でしょ。帰るわ。じゃあね」「おい待てよ、景子……」

立ち上がろうとした信一の頭上に、たっぷりと嫌味が含まれた励ましの言葉がかけられた。

「ガンバってね。 フン!」

景子は荒っぽく上着をつかむと、ドスドスと音を立てて部屋の下まで行った。

勢いよくドアを開け、後ろを振り返る。そして鋭い目でキッと睨みつけると、全身の力を込めて、叩きつけるよつこドアを閉めた。一瞬部屋全体が軋むほどの勢いだ。

信一は呆然とドアを見つめていると、アパートの階段を大きな足音が遠ざかっていくのが聞こえていたのだつた……。

ここには竹中信一が住んでいるアパートの、一階にある自分の部屋である。

安月給のサラリーマンである信一が、町中の不動産屋を探して回り、ようやく見つけた家賃三万円のアパートだ。繁華街からはかなり離れているが、会社に近いということで、この町の不動産屋をくまなく探していたのである。

閑静な住宅街の中に、ポツンと建っている古ぼけた木造の一階建てアパート。

最初にそのアパートを見たときは、まるで明治時代に建てられたんじゃないかと思うほど古ぼけていた。一階に二部屋、二階にも二部屋。全部で六世帯分である。

その古さにこの部屋を借りることを一瞬ためらつたが、家賃三万円は魅力的だ。今どき、そんなに安いアパートは存在しないだろう。そのアパートには、一階と二階それぞれに一部屋ずつ空き部屋があつた。信一は少しでも見晴らしのいい一階の一一番奥の部屋を借りることにしたのだ。

廊下を歩くとミシミシと音がする。今にも抜け落ちるのではないかと思ひつぼど。部屋の広さは1DK。トイレとシャワールームが同居するコーシートは好きではないが、まあ贅沢も言ってられない。竹中信一、二十三歳。今日が記念すべき、彼の誕生日である。さつき勢いよく飛び出して行つたのは、安田景子、二十二歳。一週間前に誕生日が過ぎたばかりで、信一より一歳年下。

この一人、約一年ほど前、友人の紹介で知り合い、交際を始めた恋人同士である。

景子は、今年大学を卒業したばかりで、信一が住んでいるアパートの近くの、会社の事務をしている〇一だ。

会社には両親と共に住む自宅から通い、なかなか泊まりでは出しあれなかつた。といつても、両親が厳しいわけでもないが、どちらかと言えば箱入り娘的存在だろう。

しかし、今日は信一の大事な誕生日。両親には申し訳ないが、景

子の友人に協力してもらい、何とか口実を作つて、一泊二日の予定で信一のアパートに来ていたのである。

景子は今日の記念すべき信一のバースデイを、一人で共に分かち合い、一人で共に喜び合おうと、仕事が先に終わる景子が、信一の部屋でパーティーの準備をしていたのである。

豪華なディナーとシャンパン。それからワインは赤にしようか、白にしようか。テーブルにはキャンドルを灯し、BGMはモーツアルトの弦楽三重奏でも……。と、やりたいところではあるが、そんな予算があるわけでもなく、もちろんクラシックCDがあるのでない。

そこで……。

「どんなに素敵なレストランの食事より、私が作つた手料理の方が美味しいに決まってるわ。何たつて、愛があるんだもん。愛に勝る調味料はないはずよ」

景子は自分にそう言い聞かせながら、早速料理を作り始めたのである。

料理のレパートリーは多い方ではないが、自慢できる料理はいくつかあつた。

信一の好みも少しは知つてゐるし、その中で一つ二つ、料理に入れておけば、信一は絶対喜んでくれると確信していた。

時計を見ると、もうすぐ午後八時。信一が仕事を終えて、そろそろ帰つて来る頃だ。

「早くしなくっちゃ」

景子は上機嫌で手料理を作り続けた。急がなくては信一が帰つて来てしまう。その前に、部屋の掃除もしなければならなかつたのだ。掃除といつても、片付けようがないくらい物が散乱している。所詮、一人住まいの男の部屋というものは、どこでも散らかっているのかもしれない。

しかし、他人から見ればガラクタの山でも、本人にとつては大事な宝物と思っているものが、部屋中に溢れているものだ。

料理を作り終えた景子は、部屋の中を片付け始めた。テーブルの上をきれいに拭き上げ、周りのガラクタは部屋の隅に押しやつた。片付けようのない部屋だが、せめてテーブルの周りとお布団だけは綺麗にしなくっちゃ、と張り切っていたのだ。

この場所は、今日のバースデーパーティーのメイン会場。言い換えれば、高級ホテル（鳳凰の間）にも値する場所なのである。

料理をテーブルの上に並べ、信一が帰つて来るのを待つだけとなつた。

一息ついた景子はテーブルの横に座り、何気なく部屋の中を見回していた。

その時、テレビの下に置いてある青い袋に目が止まつた。レンタルビデオの袋だつた。

「何借りてきたんだろ？ もしかしたら私が観たいって言つてた映画のビデオかもしれないわ。優しいのね、信ちゃんたら」

景子がその袋を取り上げ、中に入っているDVD一枚を取り出した。そして中から出てきたのが、「それ」だったのである。

普通、男の部屋にはどこにでもあると思われる、エッチ系のもの。そのタイトルも、景子は恥ずかしくて口に出せないほどリアルなものだつた。

「何でこんなものはあるの？ そりや、男の人はみんな見てるかもしれないけど、今日は私が来るの分かつてるはずじゃない。それに……」

景子は呆然とそれを見つめていた。

男がこんな物を見るのが理解できないわけではないが、今日は一人だけの世界を思う存分満喫するはずだつたのだ。そこに変な邪魔者が入り込んだような、複雑な心境になるのも仕方ない。

軽快な足音がアパートの廊下から聞こえてきた。そして弾むようにドアが開いた。

「ただいま！ 待たせたな。準備はできる？」

よりもよつて、タイミング悪く信一が帰つて来たのである。

景子は背中を向けていた。

「た、だ、い、ま！　びっしたの？　座つたまま寝てんのか？」  
けーこちゃん」

信一が景子の肩に手を乗せようとした瞬間、突然景子が振り向いた。その目が怒っているのが信一にも分かった。

「何、だよ、怖い顔して。どうかしたのか」

「何よこれ！　今日は何の日か分かってるの？　私がいるのにびっ  
いつつもりよ！」

景子の手に、あのDVDRが握り締められていた。

「あっ！　いや、それは、つまり、その……」

青くなっている信一の顔に、一枚のディスクが飛んで来たのだった  
……。

アパートを飛び出した景子は、あてもなく歩き始めた。どこに行こうといふのではなく、このままいても大喧嘩にしかならないことは、景子にはよく分かつていた。

ただ、自分の気を静めたかったのだ。

その景子の後姿を見ている、一台の黒いワゴン車があった。そして景子が歩き始めると、ゆっくりとその車も動き始めた。むしゃくしゃしている景子は、そんなことには気づかず、ただ歩き続けていたのだった……。

(二)

「もしもしし、今晚は、竹中ですが……」

「あり、信ちゃん。久しぶりね、元気にしてるの?」

「どうも」無沙汰して。あの、景子ちゃん、帰りますか?」

景子が部屋を飛び出してから、一時間近く経とうとしていた。すぐ気を取り直して帰つて来るだろうと思つて待つていたが、一向に帰つて来る気配がない。

信一は携帯電話に登録してある景子の自宅に電話してみると、元気ではないと電話してみることにしたのだ。

「今日は帰つて来れないわよ」

と、景子の母が言つた。「何でも友達の由美ちゃんが今日誕生日なんだつて。それで泊りがけで、みんなでお祝いするつて言つてたわ

「由美ちゃんちですか」

「そうなのよ。信ちゃん、聞いてなかつたの?」

母が心配そうに訊いた。

景子の両親には公認のお付き合いをさせてもらつていて、信一だが、さすがに「泊一日でデートとは言えない」。景子は由美の協力を得て、信一のアパートに泊まる手はずだったのである。

「あつ、思い出しました。確かにそう言つてたみたいですね。僕忘れてました」

「信ちゃんは行かないの?」

「もう夜遅いですから。それに女の子たちで楽しんでいるところを、邪魔できませんからね。後で電話でもしてみます。じゃあ、また」

信一は、景子の完全犯罪を何とか遂行させようと必死だった。もしかしたら景子がアパートに帰つて来てそのまま泊まることになれ

ば、じこで景子のアリバイを崩すわけには行かなかつたのである。

信一は電話を切ると、そのままポケットにねじ込んだ。

しばらく考えた信一は、また携帯を取り出すと、アドレスから由美の番号を探し出し、発信のボタンを押した。

数回の呼び出しが鳴つたあと、元気の良さそうな明るい由美的声が聞こえた。

「もしもし、信一さん？ どうしたの？」

「いつ聞いても元気良さそうだね。何か良いことでもあつたのかい」「そんなことないわよ。私はいつも、何があつても元気がいいの。明るく楽しく美しく、というのが私のモットーなの」

「美しくねえ……」

「何よ、何か文句があんの？ それよりどうしたの。信一さんの方が元気がないじゃない。何かあつたの？」

由美が心配そうに訊いて来た。

「景子の奴、そっちに行つてないかな」

「あれ、今日は一人で一緒にいるんじゃないなかつたの？ 信一さん、今日誕生日なんですよ、おめでとう」

「おめでとうじゃないよ。おめでたくないんだよ、それが」「どうしたの？」

「実は……」

信一は今日のアパートでの出来事を話し始めた。

景子が怒つてアパートを飛び出したところまで話をしたが、さすがにその原因となつたビデオの話はできない。

「それで、ちょっととしたことでケンカになつちやつて、出て行つたつきりどこにいつたか分からんんだよ。由美ちゃん、どこか心当たりないかな」

「さあ、私も分かんないわ。何かあつたらうちにもうると思つんだけど。ねえ、ちょっとした事つて、何があつたの？ どうしてケンカになつたのよ」

「いや、大したことじゃないんだ。怒るようなことじやないと思つ

んだけどね

信一は鼻の頭をかきながら、ボソボソと呟くように言った。

「でも景子が怒るなんて滅多にないことでしょ。あの温厚な景子が怒るなんて、よっぽど腹が立つたはずよ。何があつたの？」

由美はその手の話になると、身を乗り出すように訊いてくる。テレビのワイドショーはよく見るし、そこらへんのスキヤンダルは何でも知っていた。一種の情報塔とも言えるべき存在なのだ。

その時、外は、小粒の雨が降り出していた。

「とにかく、一度アパートに戻つてみるよ。もしかしたら帰つて来てるかもしねーし」

「分かつたわ。じゃ、さっちにしてもまた連絡してね。心配だから後でまた電話するよ。もし景子がそっちに行つたら、引き止めてくれないかな。　じゃ、ごめんな」

信一は電話を切ると、真っ暗な空を見上げた。まだ小雨だが、しだいに雨足が強くなりそうな気配が感じ取られた。もう梅雨は明けたはずだが、今ごろの雨は気まぐれである。いつ降り出して、いつ晴れるのか、見当がつかない。信一はこの雨を、女心と同じだ、と思いつながら、小走りでアパートへ向かった。

勢いよくアパートの階段を駆け上ると、自分の部屋まで一直線に走った。廊下の床が、今にも抜け落ちそうな音を立てていた。

もしかしたら帰つてるかも、と思いながらドアを開けてみる。しかし、景子が帰つている様子は見当たらなかつた。

「ちくしょう、どこ行つたんだよ」

信一はその場に座るうとした。その時、外から大きな雨音が聞こえてきた。

雨が本格的に降り出した音だつた。

「もしかしたら、近くで濡れてるかも……」

信一は一本の傘を持つと、慌てて外に飛び出して行つたのである。



(二)

通りを走る車の数は少なかつた。時折客を乗せたタクシーが走り去つていく程度である。国道から少し入り込んだ住宅街は、仕事先から帰宅する車や、タクシーくらいしか走らない。

今頃は、どこの家庭でも父親が帰宅し、一家団欒の楽しいひと時を過ごしている時間であろう。各家の明かりは灯り、賑やかな笑い声が漏れている家もあつた。

「何よ、あんなもん。スケベなんだから」「うう」

景子はアパートを飛び出し、ブツブツ滋きながら歩いていた。アパートを出て左に真っ直ぐ行くと、近くに公園があつた。大きな公園ではないが、子供用のブランコと滑り台、そして石で作つてあるベンチが設けてあつた。

景子はブランコに腰をかけ、一人で考え方をしていた。

「帰る！」

と信一に言つたものの、本氣で帰るつもりはなかつた。

「ちょっと言い過ぎたかな。私もバカよね、あんな事くらいで。やっぱアパートに帰ろうかな」

景子はそう考えながら、立ち上がりうとした。

「でも私のこと、探しに来てくれてもいいんじゃない。こんなに近くにいるんだから」

景子はまた、ブランコに座り直した。

そんなことを数回繰り返していくうち、雨がぽつぽつと降り出した。

公園の中には雨宿りする場所はなかつた。入り口の前にある商店の軒下まで景子は走ると、しばらくその場で雨をしのいでいた。信一がさつきまで歩いていた道とは逆の方向である。

しだいに雨足は強くなってきた。

景子は信一のアパートに帰ることを決心した。アパートに帰つて信一に「ゴメンナサイ」と言えれば、今日は楽しい夜になることも、景子にはよく分かつていた。この雨でも走つて行けば、ずぶ濡れになるような距離ではなかつた。

ハンドバッグを頭に載せ、軒下を出ようとした時、突然誰かが景子の腕を?んだ。

「キヤツ!」

景子が後ろを振り向くと、そこには二十代半ばくらいの男が、景子の腕を?んで冷ややかに見下ろしていた。

「何するんですか! 放して下さい!」

景子は真っ青になり、震える声で言った。

「静かにしろ。別に危害を加えるつもりはない。ちょっと一緒に来てくれないか」

男は無理やり景子の腕を引っ張る?としていた。

近くに黒いワゴン車が停まっていた。そのワゴン車の中からもう一人男が出て来ると、景子に近づいて来た。

「やめて下さい! 放してよ! 誰か? 誰か助けて!」

景子は大声で叫んでみたが、その辺りに人影はなかつた。

雨が地面に叩きつけるように降つていた。その音で景子の叫び声もかき消されていた。

「何ですか? あなたたち。私をどうしようといふのよ」

「心配するな。俺たちは何もしねえよ。ちょっと人から頼まれただけだ」

「誰から?」

「それは今は言えねえな。とにかく黙つてついて来な

男は冷やかに言った。

ヤクザや暴走族風には見えなかつたが、体格ががつしりとしているスポーツマンタイプの男だつた。車から降りて來た男も、冷たい目つきで景子を威嚇していた。

ワゴン車は十メートルほど離れたところに停めてある。エンジンは切つてあつた。いつから停めてあつたのか、景子には分からなかつた。

公園に来たときから停まつていたのか、ワゴン車がそこに停まるのに気づかなかつただけなのか。景子が座つていたブランコからは、あまり離れていなかつたのだ。

いつの間にか、二人の男に両脇を抱えられていた。

「ちょっと、やめて下さい。放して……放してよ！」

景子は必死で抵抗した。

「静かにしろ。痛い目にあいてえのか」

最初に声をかけてきた男が、低くドスの聞いた声で言つた。

「いいからこのまま車の中に放り込もうぜ」

「その方が手っ取り早いか」

景子は足をバタつかせ、懸命に抵抗した。しかし所詮は女の力だ。二人の男にかなうはずはなかつた。

ズルズルと引きずられるように、ワゴン車のドアの前まで連れて来られた。三人ともずぶ濡れだった。男が後部座席のドアを開け、強引に景子の身体を押し込む。

「痛い！ 分かったわよ。分かったから乱暴にしないで。お願ひします！」

景子は半ば諦めかけていた。誰も助けに来る様子もない。

車の中を見回すと、運転席にもう一人男がいた。全部で三人である。

運転席の男は、帽子をかぶり黒っぽいサングラスをかけていた。

その男がどういう人物か、景子には？ めない。

「おい、連れてきたぜ」

スポーツマンタイプの男が言つた。

「ああ……」

運転席の男はその一言だけで、後は何も言わなかつた。後ろを振り向こうともしない。

景子は一人の男に挟まれる形で後部座席に座らされた。田つきの悪い男がドアを閉める。

「これからどうするんだよ」

景子の右にいる男が訊いたが、運転席の男は何も言わず、エンジンのスイッチを入れた。

「私をどうするの。私をどこに連れて行こうとしてるの」

景子は哀願した。「お願ひだから乱暴なことはやめて下せー」

「うるせえ！ お前は静かにしてろ」

田つきの悪い男が、更にその田を鋭くして低く唸った。

その時、ワゴン車が急発進して走り始めたのである。

景子には、何もなす術がなかつた……。

呑きつける雨の音を聞いた信一は、アパートを飛び出すと、公園の方へと向かつて行った。左手で自分の傘を差し、右手に景子のための傘を持っていた。

公園の方に目を向けた信一は、入り口に前に停まっている黒いワゴン車に気がついた。

そのまま歩き出そうとした時、突然車のエンジンが始動する。そして車のライトが信一の視界を遮つた。

急発進した車の中にいた景子の瞳に、ライトに照らされた信一の姿が映し出された。

「信一さん！」

景子は大声で叫んだ。「信一さん、助けて！ いいよ！」

身を乗り出して窓を開けようとしたが、二人に男に身体を押さえつけられ、動くことができない。

「無駄なことはやめな。どうせ聞こえねえよ」

左の目つきの悪い男が、冷たく言い捨てた。

一瞬目が眩み、立ち止まつた信一の横を、猛スピードで黒いワゴン車が走り去つた。

その速さのせいか、信一の身体に、まるでシャワーのまつな水しぶきが浴びせられたのだ。

「バカヤロー！」

信一はワゴン車に向かって大声で叫んだ。身体はびしょ濡れである。

しかし信一が叫び終わる頃には、すでにワゴン車は遠くまで走り去っていた。

そしてそのワゴン車に景子が乗っていたことが、信一には知る由もなかつた……。

## その四

### (四)

繁華街に近い町の一角に、瀟洒な佇まいの五階建てのワンルームマンションが建っている。豪華、とまではいかないが、アパートとマンションの中間ぐらいという程度の造りだ。学生にはちょっと贅沢だが、大金持ちの社長さんが住むようなマンションではない。独身桃のサラリーマンやO・Sが、一人で住むのにちょうどいい、近代的なマンションである。

最上階の一一番隅の部屋に、田辺由美は住んでいた。

田辺由美、二十二歳。景子とは高校生の時からの友人で、お互いか何でも話せる無一の親友だと認め合っていた。高校の時のクラスも三年間一緒だし、大学も同じキャンパスで学んだ。

由美の性格は、明るく活発で、おしゃべりが大好きである。いろんな人とすぐ打ち解けるし、話してもよくできる。だからといって、うるさがられることはなかつた。

由美の周りにはいつも多くの人が集まり、老若男女を問わず気に入られた。

どこか一部がいいというわけではないが、一種のカリスマ性みたいなものがあるのではないか、とよく人に言われていた。しかしそんなことは自分では分からなかつたし、氣にもならなかつた。

でも、いつも楽しいはずなのに、一人になるとふつと寂しくなることがあつた。悩みもあれば、泣きたいことだつていっぱいある。だが決してそれを人前で出すことはなかつた。それが由美の魅力でもあつた。

情報塔とよく言われるが、多くの人と話をすれば、否応なく何かの情報は入ってくるものである。自分の方から訊くのではなく、人が自分に話してくるのだから仕方ない。

「私だつて訊きたくて聞いてるんじゃないわよ」

由美はよくそんな風に呟いていた。由美だつて本当はセンチメンタルな女の子なのだ。

今日も仕事が終わり、会社の同僚に誘われて、喫茶店のお茶会に参加した。

若い〇一ばかりのお茶会は、上司には聞くに耐えない話が多い。会社や上司への不満や、セクハラに関する話題が多くを占めている。本来は〇したちの仕事の未熟さや、おしゃべりなど、上司からも言いたいことは山ほどあるのだが、逆セクハラだつて無きにしも非ず、というところだろう。

一時間程度のお茶会の後、マンションに帰り着いたとき、タイミングよく信一から電話があつたのだった。

信一からの電話の後、由美は知つてゐる限りの友人の家や携帯に電話をかけてみた。しかし、どこにも景子が寄つたという情報は得られなかつた。そしてコンビニで買って来たお弁当で食事を済ませた由美は、信一からの一度目の電話を待つてゐたのである。

シャワーでも浴びようか、と由美が立ち上がりかけたとき、携帯の着信音が鳴つた。

相手を確認せずに、由美は電話を取ると、前置きもなしに言った。

「信一さん、待つてたのよ。どうだつた?」

由美は相手の返事を待つたが、しばらくの沈黙があつた。「もしもし……誰?」

「信一さんじゃなくて悪かつたな」

野太い男の声がした。「俺だよ、俺。俺の声、忘れちまつたのか?」

「弘……ちゃん?」

由美は不安げに訊いた。

「そうだよ、俺だよ。コ一ちゃん」

「何だ、びっくりしちゃつた。どうしたの、突然電話かけてきたりして」

「何ではないだろ。別に何でもないよちよつと声が聞きたくなつただけさ」

電話の相手は片瀬弘一だつた。由美の大学時代の先輩で、二歳年上である。年上の先輩といつても、ほとんど友達状態に近く、何でも話せる仲間、という感じだつた。景子のことも少しほは知つてゐるが、由美ほど仲良くしていいたわけではなかつた。

「それより何だよ、いきなり信一さんだなんて。お前、信一さんとよろしくやつてんのか」

弘一はぶつきらぼうに言つた。

「何言つてんのよ。そんなことあるわけないでしょ。景子の彼なんだから」

「でも、信一さんからの電話、待つてたんだろ」

「うん、それはそうなんだけど……」

「何かあつたのか」

弘一は心配そうに訊いて來た。

由美は携帯を片手に冷蔵庫から缶コーヒーを取り出し、部屋の三分の一を占めるベッド兼ソファーアに座り直した。

「それがさ、今日は信一さんの誕生日なんだけど、アパートでケンカしちやつたらしいのよ。それで景子が飛び出して、どこに行つた分からぬの。まさか弘ちゃん、知つてのはずないよね」

缶コーヒーで喉を潤した由美は、一気にそう話した。

「俺が知つてゐるわけないだろ。どこか別の男の所にでも行つたんじゃないのか」

「何よその言い方。景子がそんなことするわけないでしょ。あの子はそんな浮氣者じゃないし、あの一人は愛し合つてゐるのよ。私から見ても分かるもん」

「だつたら心配することないじゃないか。愛し合つてゐるんだつたらすぐ帰るはずだよ。もう今ごろ帰つてるんじゃないのか」

「まだ分からぬいよ。だから信一さんからの電話、待つてゐるのよ」

「だから、まだ連絡ないんだろ。まだ帰つてないんだよな。そ

れよりお前も信一のことが、好きなんじゃないのか

弘一はわざと話題を変えようとする言い方で話した。

「 そつよ、好きよ。初めて会った時から好きだったけど……でも、今は景子の彼だし、横恋慕はダメなの

と、自分に言い聞かせるように由美は言った。

「 かまうこたねえよ。友達より男だよ。本当に好きだったら、横取りしても自分のものにしたいんじゃないのか

弘一はあっさりとそう言つた。

「 何てこと言うのよ。ひどい人ね、あなたつて。弘ちゃんがいつもそんなこと言うから、私は……」

由美はそこまで言つと、言葉に詰まつた。本当は弘一にもつと言いたいことがあつたのだが、言葉に出せなかつたのだ。

「 分かつたよ、冗談だよ。そんなに怒ることないだろ。俺もどこか心当たりを探してみるよ。」 後でまた連絡するから

「 お願いよ。何か分かつたらすぐ電話してね。じゃ、待ってるわよ

由美は電話を切ると、ため息をついた。そして残つてゐる缶コーヒーを一気に飲み干すと、

「 何で弘ちゃんたら、分かつてくれないんだろう?……」

と、一人呟いていた。

由美が時計を見ると、午後十時を少し過ぎてゐる。信一から電話があつてから、一時間以上が過ぎていた。

外はまだ雨が降り続いていた。まさか事故にでも遭つたんじやないか、とも心配してみたが、調べる方法がない。景子の実家に電話してみようかとも思つたが、信一も帰つていないと言つていたし、今日は自分のマンションに泊まることになつてゐる。従つて、由美が電話をすると、却つてまずいことになつてしまつ。ただ信一からの電話を待つしかなかつたのだ。

由美は何となくテレビを見ていた。

バラエティ番組で面白そうな内容だったが、頭の中には全く入っていなかつた。テレビを見るのではなく、見ているだけである。

由美はテレビを見ながら、景子のこと、信一のこと、そして弘一のことを考えていた。

弘一からの電話があつてから、三十分近く経つたとき、また電話の着信音がなつた。非通知だ。

由美はボタンを押すと、今度はちゃんと前置きを言つた。

「もしもし、田辺ですが……」

今度こそ信一からだと思つたが、電話の向こうはまた沈黙があつた。

「もしもし……誰？ 信一さん？ 弘ちゃん？」

由美は不安げに言つた。

「安田景子つて女、知つてるか」

突然、男の低い声がした。

「はい、知つてますけど……。あなた、誰ですか？」

「安田景子に男がいるだろう。彼氏だよ、彼氏」

相手の男は由美の問いに答えず、一方的に話を続けた。「その男のことだ、ちょっと訊きたい事があるんだが」

「ちょっと待つてよ。自分の名前も言わないで失礼じゃないの。誰よあんた」

由美はこの電話がただ事じゃないと分かつたが、相手のベースに乗せられないように気をつけた。

「フツ、元気のいいお嬢さんだ。俺のことはあまり聞かないほうが多いんじゃねえか。人の命が懸かってるんだ。言うことに素直に答えたほうが身のためだ」

男の声はドスが効いていた。

「人の命って誰のことですか。何のことだかさっぱり分かんないわ」「安田景子とその男。場合によれば、お前の命だって保障できねえな。 その男の名前、何て言つんだ」

「知らないわ」

「どこに住んでる」

「知らないわよ」

由美は気丈な女である。酔っ払いや暴走族などにからかわれても、常に毅然と対処できる強さを持っていた。

しかし景子の命が懸かるとなれば、そつぱいかなかつた。

「景子はどこにいるの？」

「さあ、どこかな。それよりお前が景子の男を知らないはずがない。調べはついているんだ」

「知つていればどうなのよ」

「今すぐその男をそこへ連れてくるんだ。お前が住んでいるマンシ

ヨンだよ。いいな、今からすぐだぞ」

男は威圧するように言った。

「ちょっと待つてよ。私は……」

「景子が殺されてもいいのか。人の命は大事にした方がいいんじゃねえか」

「何言つてるのよ。それはこいつちの台詞でしょ」

「また後で電話する。いいな、すぐに連れて来るんだぞ。分かつたな」

男は低く唸るような声でそう言つと、突然電話を切つてしまつたのである。

由美はじばらぐ、静かになつた携帯電話を見つめていた。

「何なの、今の……。間違い電話じゃないわよね」

「こうことは、「景子が誘拐された……」

由美は一人で咳きながら、頭の中を整理しようとしていた。しかし突然の出来事に、頭の中は錯乱状態である。

携帯を閉じた由美は、慌てて服を着替え始めた。パジャマ姿なのだ。

とにかく信一さんに知らせなきや……。

由美はジーパンとTシャツだけの、楽な格好でマンショソを飛び出すと、最近買つたばかりの軽自動車に乗り込んだ。車で飛ばせば、

信一のアパートまで十分くらいでいける距離であろう。  
雨はまだ降り続いていた。

## その五

### (五)

テーブルの上に置いてある灰皿に、タバコの吸い殻が山のようにならぬまつっていた。

ムシャクシャして来ると、本数が増えてくるのが信一の悪い癖だ。景子がタバコの臭いを嫌がるので、いつもはあまり吸わなかつたが、景子がいなくなつたことで、精神的に落ち着かないのだ。

景子がアパートを飛び出してから、数時間が経とうとしていた。

信一は知つてゐる限り、彼女が行きそうな所に電話を掛けまくつた。近所も公園から路地裏、人の家の庭から、屋根の上（もちろん、そんなところにいるとは思わなかつたが）まで探し回つた。

しかし、どこにも景子が姿を見せた形跡は見当たらない。

信一は景子が絶対にアパートに帰つて来るはずだ、と自分に言い聞かせ、作つたあつた料理にも手をつけず、一人寂しくアパートで待つこととしたのである。

どこかにやけ酒でも飲みに行こうと思つてみたが、もし、景子が帰つてきた時、自分がいなかつたら、それこそ大変なことになる。

信一は冷蔵庫から、缶ビールを一本取り出してきた。景子が今日のパーティーのために買つて來たビールだ。

一口飲んだ信一は、テレビのスイッチを入れ、チャンネルをあちこちと変えてみた。しかし今の信一には、何を見ても面白くない。「つまんない番組ばかりじやんか。何か面白いのやつてないのかな」と一人、ふてくされていた。

テレビの下を見ると、例のDVDが転がつてゐる。信一はおもむろにそれを拾い上げると、そのままデッキに差し込んだ。そしてリモコンのスタートボタンを押してみる。

画面には、いきなり女の子の裸体がピアッピで映し出された。そ

してなまめかしい声が、部屋中に広がった。

信一はそのシーンを見ながら、興奮するじりむか、逆に怒りがこみ上ってきた。

「クソーツ、面白くねえ！」

信一は手に持っていたリモコンを放り投げた。その拍子に、テレビの電源が切れてしまった。

部屋の中は、静寂だけが重苦しくくらいに残っていた。

信一は缶ビールを？むと、一気に飲み干した。外からは、雨の音が絶え間なく聞こえていた。

しばらく考え事をしていると、その雨音に混じって、アパートの階段を上がってくる足音がしていることに気がついた。その足音が、ゆっくりと信一の部屋に近づいて来るのが分かる。

「まさか……」

信一が廊下の方に耳を傾けると、部屋の前で足音が止まった。そして部屋のドアが、一度ノックされたのである。

信一の顔がほころんだ。

「景子……景子か！」

信一は駆け出すと、勢いに任せて思いつきりドアを開けた。

鈍い衝撃音がした。ドアが何かに当たつたらしい。信一は心配そうにドアの外を覗いてみた。

「痛えな！ いきなり開けるなよ……」

男が額を押されて、しゃがみこんでいた。

「何だ、賢介か。どうしたんだよ！」

「どうしたんだじゃないだろ。お前がいきなりドアを開けるから……」

「痛つてえ！」

ドアに頭をぶつけたのは、信一の会社の同僚である、齊藤賢介だった。会社内でも一番の仲良しで、今ではお互いに親友と認め合つほどの仲である。

賢介は体格ががつしりとしているスポーツマン。いや、武道家というべきか。空手、柔道、ボクシングもやっていたらしく、どちら

かといえば軟弱なタイプの信一には、理想的な相棒もある。

「いやあ、ごめんごめん。ちょっと訳あります。ま、そんな感じ突

つ立つてないで中に入れよ」

「言われなくたって入るさ」

賢介は信一に促され、痛い思いで部屋に入ることになった。

「あれ、一人か。彼女はどうしたんだ？ 今日は一緒にいるんじやなかつたつけ」

「それが分かつてて、どうしてここに来たんだよ」

「何だよ、その冷たい言い方。今日はお前の誕生日なんだろ。彼女と一緒にだって言うから、差し入れを持って来てやつたんだよ。プレゼントを兼ねて。もちろんすぐ帰るさ」

賢介は、頭をぶつけた拍子に落としてしまったビール袋を拾い上げた。中には缶ビールとウイスキーが入っている。

「ほい、プレゼント。ビールはまだ開けない方がいいな。部屋中泡だらけになる」

信一はプレゼントに貰ったビールを冷蔵庫に入れると、景子が買つて来たビールを一本出して来て、一本を賢介に渡した。

「さ、これで乾杯だ」

「あれ、彼女は？」

「いないよ……」

「何で？ だつてこの料理、彼女が作つたんだろ。どこか出かけてるのか」

賢介はそう訊くと、缶ビールのふたを開け、喉を鳴らしてうつまぞうに飲んだ。

「それがさ、ちょっとケンカになつちまって、出て行つたつきりどこに行つたか分からんのだよ」

信一もビールを飲みながら言った。

「自分の家に帰つたんじゃないのか」

「それが家にも帰つてないらしい。友達のところも電話してみたんだけど、行方不明なんだ」

「そりゃ心配だな。 とにかく、何でケンカしたんだよ。 浮気がバレたのか」

賢介はニヤッと横田で見ると、からかうよつと言つた。

「何言ってんだよ。俺が浮氣する男だと思つてんのか」「あれ、しないのか？」

「当たり前じゃないか。俺がそんなことする度胸がないってこと、お前が一番よく知ってるだろ。 これだよ、これ」

信一は例のDVDを、賢介の前に差し出した。そしてタバコを一本取り出すと、百円ライターで火をつけた。

「何だ、こんなことでケンカか。ぐだらねえな、このくらいで。 これがここにあつたから怒っちゃったわけ？」

「その通り。俺も隠しあけばよかつたんだよな。忘れてたんだよ」「でも、お前も悪いよ。今日は一人つきりのパーティーだつたんだろ。こんなもんがあつたら彼女だつて怒るよ。今ビキ珍しい純情な娘なんだから。少しばは彼女のこと考へなきや」

賢介は空になつたビールの缶を右手で振りながら、信一におかわりの催促をしていた。

「しかし景子が出て行つてからかなり時間が経つし、そこまで怒るような奴じゃないんだけどな。たぶん由美ちゃんの所には連絡が行くと思うんだけど、後でまた電話してみよつと思つてるんだ」

信一の声は、次第に小さくなつていった。

「ま、いいじゃないか。今日は俺たち二人だけでバースディパーティーやろうぜ。男だけってのもたまにはいいもんだぜ。なんなら俺が彼女になつてやるよ。ネエ、シンチャン」

賢介は横座りになると、信一の肩をチヨンチヨンと突いて来た。「やめろよ、氣色悪い！ とにかく、しばらくここにいていいから、景子が戻ってきたらすぐ帰るんだぞ」

「分かつてゐるよ。とにかく飲もうぜ。 これ、食つてもいいのか？」

と、賢介が、景子が作った手料理に手を伸ばそうとした。

「やめろー。だめだよ、景子のお手製なんだかい。お前はそこのあるエビせんでも食つてら」

信一は賢介の手をぴしゃりと叩くと、語氣を強めて言った。信一もまだ手をつけられずにいたし、景子が帰つて来てから一人で一緒に食べるつもりだったのだ。

エビせんをつまみながら、賢介に今日の出来事を話していた。と、信一はサクサクといつエビせんが碎ける音の中に、またアパートの階段を上がつてくる足音を聞いたのである。その足音は、やはり信一の部屋に向かっていた。

「ほり、聞こえるか。やっぱり帰つて来たんだ。今度は間違いないぞ」

信一の目が輝いた。

コンコン、とドアがノックされる音。と同時に、信一は駆け出していた。

「景子か！」

「イターライ！」

再び信一がドアの外を覗くと、今度は由美が額を押さえてしまがみ込んでいた。

「由美ちゃん……どうしたんだよ

「どうしたじゃないわよ。信一さんがいきなりドアを開けるから……。イターライ！」

再び同じ言葉が繰り返されたのだった……。

「何だつて！ 誘拐？」

信一は叫ぶように言った。「だ……誰に……」

「そんなこと分かんないわよ。犯人は自分のこと何も言わないんだもん。ただ一方的に脅迫されて……」「……

「何て脅迫されたんだ」

「それが……」

信一の部屋では豪華な料理を横田にして、部屋の隅で三社鼎談が始められていた。

額に冷たいタオルを当てている由美。缶ペーパーを右手から離さない賢介。そして、顔面蒼白となつた信一の、会話ミーティングとなつた。

「景子がどこかに連れて行かれたのは間違いないのよ。ただ、信一さんを私の部屋に連れて来いつて。景子と信一さんと、それから私の命が懸かつてゐるんだって。ただそれだけなの」

由美は顔を強張らせながら、信一に向かつて言つた。

「何で俺を由美ちゃんの部屋に呼ぶんだらう。だって俺のこと知らなかつたんだろ」

信一は怪訝な顔つきで言つた。自分が何者かに脅かされるようなことがあるとは、夢にも思つていなかつたのだ。

「知らない振りをしているだけだと思うわ。だつて景子を誘拐して、私のことも知つてて、景子の男つていえれば信一さんしか考えられないし。きっと何か魂胆があるはずよ」

「でも信一が由美ちゃんのマンションに行つてどうなるんだよ」

賢介が一人の間に割つて入つた。

「そんなこと分からないわよ。でもまた後で電話するつて言つてたわ。そこで信一さんに何か要求でもするのかしら」

「要求だつて？ 僕、金持つてないよ」

「そんなこと言つてる場合じやないでしょ。しつかりしてよ、もう由美が信一の肩をパチンと叩く。

「警察に電話した方がいいんじやないか」と、賢介は言つた。

「待つて、早まらない方がいいと想つ。私のところにまた電話があるから、それからでも遅くはないと思つ。相手の出方を見てからよ

由美はそう言つと、両腕を組み深く考えていた。「でも何の目的があるんだろう。本当にお金だったら景子の家に電話するはずよね。どうしてお金持つてない信一さんなんだ？」

「もつてなくて悪かったね」

信一は撫然として言った。

「今はそんなの問題じゃないだろ。たぶん誰かに関係してるんじゃないのかな」

「誰かつて？」

「たとえば景子ちゃんの前の彼氏とか、今、景子ちゃんに惚れてる男とか。まさか信一に惚れてる女はいな」と思ひけど、その女に頼まれたとかさ」

賢介は一人を交互に見ながら言った。

「それはどうかな。景子は信一さんと付き合つ前は、長い間恋人なんていなかつたわ。それに最近だつて、景子に近づく男なんて……」

「じゃあ俺か。そんな女いたかなあ」

「それも考え方られないよな」

賢介はあつさりと言つた。

「余計なお世話。もつとましなこと考えられないのか」

信一は自分ではあまり考えられないのに、賢介だけを責めていた。もちろん信一の頭の中はパニックになつているのだから、仕方のないことではあるが。

「とにかくこんなところでクドクド言つてたつて始まらないよ。早く由美ちゃんのマンションに行こうぜ。警察は犯人からの電話の後だ

賢介が一番に立ち上がる。

「そうね、とにかく行きましょう。わ、信一さん、頑張るのよ」

由美の一言が、信一の勇気を奮い起こした。

そして三人は、由美の車で、マンションへと急いだのだった……。

## (六)

波が岩場に打ち寄せる音が間歇的に聞こえている。大きな波ではない。小さな波が、優しく岩肌を撫でるように打ち寄せていた。他に聞こえるものは何もない。

ここがどこか海岸沿いの家の一室らしいことは分かる。しかしその部屋は、真っ暗闇で何も見えなかつた。

部屋のどこかに寝せられている。ベッドだろうか、ソファーダラうか。柔らかい感触が全身に伝わつていた。

「ここはどこなんだろ?……」

景子の頭と身体には、何となく痛みを伴う痺れが走つていた。今まで眠つっていたのだろうか。どこから記憶がなくなつているのか全く分からぬ。自分が置かれた状況が把握できないのだ。

部屋の窓には分厚いカーテンが引かれ、明かりはどこからも入つていなかつた。ただ闇の中に、景子の吐く息と波の音が繰り返し流れているだけだ。

景子は起き上がるうとした。しかし体が言うことをきかない。全身が痺れていいるせいだろうか。景子は手足を少し動かしてみた。しかし手足は、景子の命令に従わなかつた。手首と足首を、何から一縛のよつなもので縛られていたのである。

景子は身動きができなかつた。

「何で私がこんな目に遭うんだろ?……」

どうしても景子には理解できない。

とにかく今までの状況を思い出してみよう。

「そうだ、信ちゃんのアパートを飛び出して、公園の前で誰かに…

…

暗い部屋の一点を見据えて、回顧していた。

ワゴン車に押し込まれた景子は、抵抗むなしく拉致されました。

急発進した車の中から信一の姿を見つけたとき、景子は信一と田が合つたような気がした。しかし外からでは雨も降っていたし、車のライトを浴びた信一の目に、車内の様子など分かるはずがなかつたのだろう。

「私をどうするつもりなの」

景子は身体を縮め、震える声で言った。

「どうもしやしねえよ。余計なことは訊くな」

左にいる田つきの悪い男が、窓の外を見ながら言った。

「どうもしないつて……どこに連れて行く気なの」

「さあね、俺は知らねえよ」

「あなたたちは一体何者なの？　何の目的があるの？　ねえ、教えてよ」

景子の声が次第に大きくなつていった。

両隣にいる男一人は、まったく面識がない人間だ。景子の目が、運転席の男の後頭部を見ていた。

「あなたは誰？　顔を見せてよ」

景子はそう言つと、運転手の肩に手をかけようとした。

「おつと待ちな。そんなことしちゃ危ねえじゃねえか。事故つて死ぬのはごめんだぜ」

両隣にいる二人の男に、景子の身体は引き寄せられた。

「おとなしくしてないと痛い目に遭うよ。そつなつてもいいのかい、

景子ちゃん」

左の男が優しい口調の中にも、威圧するような声でさう言った。

「　どうして私の名前を知ってるの？　なぜ私を……」

景子の顔に戸惑いの色が浮かんだ。なぜ自分の名前を知っているのだろうか。

車は繁華街に差しかかろうとしていた。今日は土曜日だところの

に、繁華街を歩く人は少なかつた。急に降り出した雨のせいかもしれない。

景子は虚ろな目で外を見ていた。逃げる隙はないのだろうか。

車が繁華街のメインストリートの信号で止まつた。赤信号である。車の横を数人の若者が歩いていた。景子の両隣にいる男たちは、それぞれに窓の外を眺めていた。

景子は男の虚をついて車のドアを開けようとした。ドアが半分ほど開いたのだ。

「助けて！ 助けてください！ 誰か助け　」

景子は大声で助けを求めた。

横を歩いていた若者たちが振り向いた。そしてその中の一人がワゴン車の方に一步踏み出したとき、車は急発進した。信号はまだ赤だつた。

「バカヤロー！ 何しやがるんだ。てめえ殺されたいのか！」 景子の身体は再び二人の男に押さえつけられていた。

「やめて！ お願いだから助けて下さい！」

景子は発狂寸前だつた。大きく身体をゆすりながら、車の中でわめき散らしていた。とにかくこの場から開放されたい、自由にしてほしい、早く信一のアパートに帰りたい。ただそれだけを願つていた。

「おい、どうする。やつちまうか、あれ　」

左の男が運転席の男に訊いた。景子の身体を押さえながらだ。

「そのほうが手っ取り早いんじゃないかな」

右の男も同調していた。

運転席の男はしばらく黙つていたが、景子の状態をバックミラーで確かめると、

「 やれ

と、一言だけ言った。

左の男がカバンの中をかき回していた。そして中から何やら怪しげなものを取り出す。

異臭がしていた。車の中に薬品の臭いが漂いだした。

男はその薬品をハンカチに含ませると、いきなり景子の顔に押し当てた。

ツーンとした臭いが鼻腔を貫く。

「やめて！ やめてください……」

口と鼻の上に強く押し当てられたハンカチのせいで、それ以上言葉が出せなかつた。

景子は懸命にもがいてみたが、手足の先から力が抜けしていく。男の服を？ んでいた手も、少しづつずり落ちていつた。そして次第に意識が薄らいでいくことが、景子には分かつた。

全身の力が抜けた。目を開けることができなかつた。

男たちが何かを話している声が、かすかに聞こえるだけだつた。

…。

「薬が効いたようだぞ」

「眠つたか」

「ああ、もう大丈夫だ。しばらく目を覚ますことはないだろ？」

「少し窓を開けろよ。こっちまで眠くなつたら大変だ」

「それよりさつきこの女の声を聞いた奴ら、何か気がついたんじやないかな。こっちを見てたぞ」

「車のナンバー、憶えられてないかな」

「大丈夫だよ。そんな暇なかつたさ」

「それよりこれからどうするんだよ」

「警察には捕まりたくないからな」

「今から海岸沿いの別荘に運ぶ。お前らはそこまででいいよ。悪かつたな、協力してもらつて」

「この女、どうするんだ」

「お前らは気にしなくていい。別に殺したりはしないし。この女が目を覚ましたら話をしたいだけだ。彼女も分かつてくれると思う」

「これだけでも犯罪なんだぞ。誘拐罪。分かつてるのか」

「結果的にはそうはならない。いや、ならなくなるんだ」

「どうしたことだよ。俺たちも片足突っ込んでるんだぞ。知る権利があるんじゃないか」

「だから……明日になればすべてが終わる。話はそれからだ」

「俺は知らねえぞ。とにかく別荘までだ」

「ああ、心配するな。へんなことにはならないぞ」

ワゴン車は海岸沿いの国道を走っていた。繁華街から一時間もかかるないとこりだ。海が街から近いこともあるが、ワゴン車もかなりのスピードを出してきていたので、割と早く海岸沿いに来たのである。景子の耳に男たちの話し声が聞こえていた。しかし意識が切れ掛かる寸前である。どの男がどの台詞を話しているのか、全く分からなかつた。話の内容を整理する力もなくなつていたのだ。

景子の消えかかる意識の中に、一本のキャンドルが浮かんでいた。そのキャンドルを挟んで、信一と景子が見つめ合つてている。一人とも笑顔だつた。幸せそうな微笑だつた。

信一の誕生日を一人で祝つている光景であった。

景子は至福の笑みを浮かべながら、なぜか目から涙がこぼれていった。

幸せな光景が霞んで来たのは、自分の涙のせいなんだ。私はこんなに幸せなのに、どうして泣いているんだろう。そんな不思議な涙を流しながら、景子は深い闇へと落ちて行つたのだった……。

足音が聞こえて來た。階段を上がる足音のようである。

ということは、ここは一階なのだろうか。

廊下を歩く音に変わつた。そしてその足音が近くなつて來たとき、ピタリと音が止んだ。

景子の身体が一瞬ピクリと動くと、恐怖感が膨らんでくる。身体中の筋肉が、少しずつ硬直していくのが自分でも分かつた。

足音が聞こえていた方向に神経を集中させると、突然ドアが開いた。

眩い明かりが景子の目を刺激した。長い時間暗闇の中にいたせいで、廊下の電灯の明かりもまぶしく感じられる。

目を閉じると、その刺激が脳まで走り、微かな鈍痛を覚えた。

景子はそこに人の気配を感じた。ドアのところに誰かが立つているのだ。

少しづつ瞼を開けてみた。しだいに光に慣れしていく。そして、ドアのノブを？ なんだまま立っている男の姿を見た。

しかし男の後ろにあるライトのせいで、その姿はシルエットになっていた。男は動こうとしない。ただじつと景子の姿を見下ろしていた。

顔が分からぬその男に、景子は小声で問いかけた。

「あなたは誰？ ここはどこなの……」

男は返事をしなかつた。ただじつと景子を見ているだけだ。

「私をどうするの。お願いだから返事をして下さい」

「心配することはない。しばらくここにいてくれればいいんだ」

男は小さな声で言った。

「あなたは誰なの。私のこと、知ってるんでしょ」

「君は綺麗だ。とても素直で優しくて、僕の恋人にしたいくらいだ」

男の声は、哀しげな口調だった。

「話をばぐらかさないで。そんなことを訊いているんじゃないわ」

「君の恋人が羨ましい。できれば代わりたいものだ」

「彼を知ってるの？ 信一さんのこと、知ってるの？」

「彼は幸せ者だ。でも一人だけ幸せになつたら不公平なんだよ」

「一人だけじゃない。私だって幸せよ」

「そうじゃない。世の中不幸な人がたくさんいる」

「私たちに関係ないじゃない。それになぜ私をこんな目に……」

しばらくの沈黙が続いた。男は中に入ろうとせず、下を向いたまま動かなかつた。

「手足は痛くないか」

「痛いわよ。早く解いてくれないかしら」

「それはできない。もう少しの辛抱だ。我慢してくれ」

「もう少しつて何があるの。それに何の目的があるの」

「もう少しの辛抱だ」

「私、あなたの声、聞いたことあるような気がする。あなたは、もしかしたら……」

景子がそう言つと、男は一瞬ギクリとした表情を見せた。そしてクルリと背を向けると、ドアを閉めて出て行つてしまつた。

景子の耳に、男が階段を降りて行く音が聞こえていた。そして部屋にはまた暗闇が戻つた。

「やっぱり私が知つてる人だ。あの驚きよう、普通じゃない。でも、どうして……」

景子はそう考へながら、自分の記憶を辿つていった。

確かに声には聞き覚えがあつた。そして体つき……。あの男に間違ひない。しかしなぜあの男が自分を誘拐したのか、見当もつかない。

景子はベッドから、縛られている両足を下ろすことができた。そしてその反動で上半身を起こした。頭から血が下がつて行くのが分かる。一瞬立ち眩みのような感覚が頭の中で渦巻いた。

手足のロープが解けないか、自分で身を振り、両腕を互いに動かしてロープを解こうとした。かなりきつめに縛つてあるようだが、景子の若くて柔らかい四肢は何とかそのロープから逃れることができるように気がしていた。

懸命にもがく両腕。手足に食い込むロープ。今にも手首がちぎれそうな痛みがしていったが、次第にロープが緩んで来た。もう少しだ、と勢いを込めて右手を引き抜いた。

痺れるような衝撃と同時に、両腕がロープから解放されたのだ。

景子の両手は痺れていた。その痺れた両手に勢いよく血が駆け巡つてきて、痛いほどだった。

大きくため息をつくと、両手の感覚が甦るのを静かに待つたので

ある。

(七)

「どうしよう……。やつぱり警察に知らせたほうがいいのかしら」「いや、もう少し待つてみよう」

「それにしても遅いわ。何かあったのかしら」

由美のワンルームマンションの部屋に、重苦しい空気が漂っていた。信一のアパートから大急ぎで由美のマンションにたどり着いた三人は、犯人からの電話を待っていた。

しかし一向に犯人からの電話はなく、ただ緊張感とも悲壮感ともいえる雰囲気の中で、まんじりともせず電話が鳴るのを待っていたのである。

「ビールでもないかな」

賢介が呟くように言った。

「何言つてんだよ、こんな時に」

「こんなときだから言つてるんだよ。素面でいるより少しアルコールが入つていてる方が、勇気も度胸も湧いて来るんだよ、俺」「ビールならあるわよ。いつも冷蔵庫の中にストックしてあるの。私も付き合うわ」

由美はそう言つと、冷えた缶ビールを三本出してきた。

「信一さんも少し飲んだ方がいいんじゃないの」

「俺はいいよ。今日は景子と二人で飲みたかったんだ」

信一は下を向いたまま、両手を頭の上に乗せて考え込んでいた。

由美と賢介は一気にビールを呷った。一人ともザルと言われるほどアルコールは強い方なのだ。

時折三人は電話機を凝視していた。

「最初に犯人から電話があつたのは何時ごろ?」

賢介が由美に訊いた。

「そうね、十時過ぎくらいだったかしい。わつ一時間以上は過ぎてるわね」

「しかし逆算してみると、誘拐されたのは信一のアパートを出でてすぐだろ」

「たぶんそうだと思つ」

信一は相変わらず頭をかきむしっている。

「ということは、八時過ぎ。もう四時間以上は経つてこないとなる。知らない者の行きすりの犯行かな」

「そうじゃないと思うわ。私や信一さんのこと、景子に訊いたとは考えられないの。彼女、そんなおしゃべりじゃないもの」

「じゃ、知つてる者の犯行か。待ち伏せしてたのかな」

「そつとしか考えられないよ」

信一が頭から手を離して言った。

「一体誰が……」

「それが分かれば苦労はしないわよ」

「電話の声は聞いた事なかつたのかい」

「電話じや分からなゐわ。私も突然でびっくりするし、相手の声を分析するなんて……」

由美は立ち上がりカーテンを開き、窓を開けて下を覗いてみた。もしかしたら電話ではなく、ここに来るのではないか、と思つたらだ。

「雨……まだ降つてるわ」

由美は考へてることとは違つ」とを言つた。

「他に電話とかなかつた?」

と、賢介が訊く。

「他には……。弘ちゃんから電話があつただけよ」

「弘ちゃん?」

「信一さん知らないかな、片瀬弘一さん。私の大学の先輩なの。景子も何度か会つたことがあるわ」

「由美ちゃんの彼氏？」

賢介が意地悪つぽくそう訊いた。信一は現在由美に恋人がいないことを知っていた。

「そんなんじやないけど……。頼りにできる兄貴、つてどこかな。一応先輩なんだけど、仲のいい友達なの」

「景子も知つてんの？」

「少しは知つているはずよ。私ほど仲良くしてたわけじゃないけどね。さつきも景子のこと相談してみたの」

「何か知つてた？」

「彼は何も知るはずがないわ。彼と景子は個人的な付き合いがあるわけでもないし。でも彼は体力もあるしケンカ力も強そうだし、犯人と揉める時なんか役に立つんじゃないかな」

「と、由美は誇らしげに言つた。「一見冷たそうなタイプなんだけど、私が困つている時はいつも助けてくれるの」

「由美ちゃん、好きなんだ、その彼のこと」

「うーん、そんなんじやないけど……。私も分かんない」

由美は何か考え込むように宙を見つめていた。

自分自身の気持ちも分からなかつたが、由美から見た弘一の気持ちもはつきりしなかつた。確かに由美には優しくするし、何でもよく協力してくれた。しかし二人の間では、恋愛じみた話など今までしたことがなかつた。そして由美が弘一に対して口癖のように言つていた言葉が、「信一さんのことが好きなの」だつた。まさか弘一がその言葉を信じているとは思つていなかつたのである。

突然現実の世界に引き戻されるように、電話の着信音が鳴り出した。一瞬部屋全体の空気が凍りつき、三人の身体がピクリと動いて目が合つた。

由美は緊張のあまり、すぐには携帯電話を取り上げられない。賢介に促されて、ようやくその手に取つた。

開いてみると、画面に表示された、片瀬弘一の名前がそこにあつた。

安堵のため息と共に、由美は通話ボタンを押す。

「何してんだよ。俺だよ」

「もつ、弘ちゃん、びっくりさせないでよ」

「驚くことないだろ。どうしたんだよ」

弘一は笑うように言った。

「弘ちゃんの話しをしてたところなの。尊をすれば影つてとこね」

「誰か来てるのかい」

「今、信一さんが来てるの。ほら、さつき景子のこと話したでしょ、行方不明だつて。あの後景子を誘拐したつて脅迫電話があつたの」由美が信一に視線を送った。信一は電話の相手が犯人じやないと分かると、ため息と共にまた両手を頭の上に乗せた。

「それで、犯人は何だつて？」

「景子のことは何も言わんんだけど、信一さんのことばかり訊いて、信一さんを私の部屋に連れて来いつて。ただそれだけだつた」「それで信一さんが来てるのか。それから?」

「また後で電話するつて言つてたけど、まだないの。三人ですつと待つてるんだけど」

「三人で？ 他に誰かいるのか？」

弘一は意外そうな言い方で訊いた。

「そうよ、ボディーガード。タイミングよく信一さんのアパートに友達が来てたの。とても遅しくて頼りがいがあるから一緒に来てもらつた。助かるわ」

由美は賢介の肩をポンと叩きながらそう言った。

「何だよ、てつきり一人でいるのかと……」

弘一は呟くように言った。

「何よそれ、どうにづうこと？」 弘ちゃん、信一さんが来てるこ  
と知つてたの？」

「いや、そういうわけじゃ……。あのさ、実は俺も景子ちゃんのこ  
と気になつてて、一緒に捜そつかな、なんて思つて」

その時、電話の向こうで、ガシャンという大きな物音がした。そ

して弘一の話も途切れた。

「もしもし、どうしたの。弘ちゃん……」

由美は不穏な雰囲気を気にしながら、何度も電話の相手に呼びかけた。

「もしもし、弘ちゃん？ もしもし……」

手の痺れは少しは良くなつてはいたが、両手のロープから解放されても、しばらくは腕に力が入らなかつた。何とか足のロープも解いておかなければ、いやとうときに逃げられない。

両手を振つて少し感覚が戻つてきたところで、足のロープも自分で解いた。かなりきつめに縛つてあつたようで、ロープの痕を手でさすつてみると、でこぼこに痕が残つていた。

三十分ほど経つただろうか。暗い部屋の中に一人でいる景子は、ベッドの上に座り、考え方をしていた。これからの作戦である。

このままここにいても、どうしようもない。何とかこの家の中を調べたかったが、物音を立てて見つかれば、何をされるか分かつたものではない。

景子はおもむろに立ち上がり、ドアに近づいた。そして音がしないようにドアのノブをしつかり?み、静かにドアを少しだけ開けてみた。廊下の眩い明かりが部屋の中に差し込んだ。目の痛みに耐え、瞼に力を入れる。そして細く目を開けて部屋の中を見回した。

さつき男が入つて来たときにはよく分からなかつた部屋の様子が、今度ははつきりと確認することができた。

部屋の広さは六畳くらいだらうか。ドアとは逆の方にある壁に窓がある。もちろんカーテンは引かれていた。その下にベッド。横には小さなドレッサーが置かれ、部屋の真ん中に丸型のガラスのテーブルがあつた。

部屋の中はきちんと整理されている。景子のハンドバッグはテーブルの上に置いてあつた。

景子は改めて自分の姿をドレッサーの鏡で確認した。正面から、横から、そして後姿を振り返りながら自分の姿を見た。乱暴されたような形跡はなかった。服もちゃんと着ている。裸にでもされいたら大変なことだ。

景子は自分の身体が犯されていないと分かると、ひとまず安堵感で胸をなでおろした。

「とにかく、ここにじつとしても始まらない。どこか逃げる場所は……」

景子はまずカーテンを開けてみた。窓を少し開けて下を覗いてみたが、やはりここは一階で、窓の下には足をかける場所もない。もちろん飛び降りる勇気などあるはずがない。骨折だけではすまないだろう。

窓とカーテンを閉めてドアまで歩くと、顔を少し廊下の方に出してみた。

一階の一一番奥の部屋だった。景子がいる部屋から廊下の突き当たりにある階段までの間に、別に一つの部屋があった。両方の部屋のドアは開け放たれ、人がいる気配はなかった。

景子は足音を忍ばせて歩き、その一つの部屋を覗いてみた。しかし何も置いてなく、ただ空間が広がっていた。

ここがどこなのか、そしてあの男が誰なのか、少しでも探つてみたかったが、明らかになるような物は何も無かつた。

景子は階段の降り口まで来ると、下を窺つてみた。階下は廊下になつていて、階段の前に和室らしい障子の引き戸があつた。その障子がほんの少し開いている。明かりは灯つていたが、人がいるかは分からぬ。

しばらくその場に立ち竦み、じつと階下の様子を窺つていた。すると、その障子に入影が映つたのである。まさかこっちに來るのでは、と景子は慌てて部屋に戻つた。

しかし誰も上がつてくる気配はない。しばらくして、景子はまた、階段の降り口の所まで來た。そして再び下の様子を窺つた。

景子の額から冷や汗が流れ始めていた。相変わらず障子は少し開いたままだ。

景子は一か八かの賭けに出ようと思つた。階段を降りてみることにしたのである。足音をしのばせ、恐る恐るゆっくりと階段を降りていく。途中まで来たところで、身体を前傾姿勢にして、頭を低く下げて和室の中を覗こうと試みた。

やはり誰かいるようである。何か酒でも飲んでいるのか、時折力ランという氷がグラスに当たる音が聞こえていた。

景子は思い切つて下まで降りてみた。しかし右側は壁で行き止まりになつていて、左はどこかの部屋のドアがあるだけだ。外に出るには、この和室を通らなければいけない構造になつているようだつた。

緊迫した空気が景子の頬を撫でた。その時、和室の中から男の声が漏れて來た。

男の声は大きくなかつた。優しく語りかけるような口調だ。

しかし今の状況に置かれている景子にとつては、口の中から心臓が飛び出しそうなほど大きく聞こえたのである。

口の中に詰まつた心臓のおかげかどうか分からぬが、驚いて出そつになつた声も止まり、和室の中の男に気づかれずに済んだ。

景子は激しく動悸する胸を押さえ、男の声を聞いていた。

他に人がいるのではなく、電話で話をしているようだつた。怖い男の声ではない。普通の男の、優しい語り口調だつた。

景子は耳を凝らして聞く。そして……。

男が呼びかけている名前は、コリ。コリ?

それに、この声、聞いたことある。確か……。

片瀬さんだ!

景子はこの男が同じ大学の、しかも由美と仲良しの片瀬弘一だといつことに気づいたのである。

その時、景子の身体は自分の意思とは裏腹に、咄嗟に動き出した。

障子の引き戸を思いつきり開け放つと、和室の中に飛び込んだ。しかし、たまたまそこに置いてあつた食事の後の食器の山に足を取られてしまった。

ガシャンという大きな音と共に、弘一が振り向いた。

景子は転倒し、その場に転がった。弘一が自分を見ている。景子も弘一の顔を凝視していた。

弘一の手に、携帯電話が握られている。景子は俊敏に起き上がり、弘一の手から携帯を奪い取つた。

弘一は突然のことでの動きが鈍くなっていた。そして景子は電話機に向かつて大声で叫んだのである。

「由美！ 私よ、景子！ 助けて！」

景子はその後どうなるか、考える余裕がなかつた。ただ、この一本の電話に救いを求めるしか方法がなかつたのだ。

「ここがどこだか分からぬけど、海の近くの家にいるわ。別荘みたいなところ。片瀬さんが私を」

弘一がにじり寄つて来ると、いきなり携帯を取り上げた。そしてすぐスイッチを切つてしまつた。

弘一は景子を見下ろしていた。景子も弘一を見みつけていた。しばらく一人の口から言葉は出なかつた。

景子の中の恐怖心はもう消えていた。犯人が弘一だと分かつたせいか、由美に助けを求めたからかは分からぬ。ただ開き直つだけかもしれない。

「あなた、片瀬さんよね。由美の」

「何も言つな」

「でも私が知つてゐる片瀬さんじやない。私が知つてゐる片瀬さんは、こんなことする人じやない。もつと男らしくて優しくて、人を傷つける人じやなかつたわ」

景子は透き通るような真つすぐな声で言つた。倒れていた身体を起こし、壁に背をつけて座る。

「どうしてこんなことするの？」

「一人でロープ解いたのか」

「そうよ。あんなもん簡単よ。 片瀬さん、一人? 他に誰かい

るの?」

「見ての通り、俺一人さ」

「確か、最初三人でいなかつたっけ」

「二人はもう帰した。あいつらには迷惑かけたよ。巻き込むつもりはなかつたんだけど、どうしても一人じやね」

「でも、共犯よね」

景子の言葉に、弘一は一瞬言葉を詰ませた。

「どうして君を誘拐したのか、あいつらは知らないよ。あいつらを責めないでくれ」

「なんでこんなことするの?」

弘一はその場に座つた。そしてテーブルの上に置いてある水割りの入ったグラスを掴むと、一気に飲み干した。

景子は弘一が何も言わないでその場に座っているのを、横から見ていた。そしてテーブルの上に視線を移した。

そこには水割りのグラス、携帯電話、そしてその横に、数枚の写真が置いてあつた。

弘一はその写真に視線を落としている。ただ無表情にその写真を見つめていた。

「それ、誰の写真なの。何か……」

景子は背筋を伸ばし、写真を覗こうとした。

「見たいんだつたら、見せてやるよ」

弘一は三枚の写真を手に取ると、景子の前に投げ出した。そして自分で水割りを作り始めた。

「この写真、由美じやない。大学生の時の写真よね」

「君も写ってるだろ?」

その中の一枚は集合写真だつた。大学時代の遊び仲間で、十人くらいは写っている。一番右端に由美と景子が並んでいる。そして一番左端に弘一が写っていた。

そして一枚は由美のシングル写真。もう一枚は弘一と由美が笑顔で肩を組んでいる写真だった。その写真では二人とも屈託なく笑っている。何の不安も心配もない、明るい笑顔だった。

しかし今の弘一の顔には、明るい表情もなければ、精氣さえ感じられなかつた。

「どうしてこの写真を……」

景子は弘一の表情を窺いながら訊いた。

「三年前の写真だよ。みんなでキャンプに行つたじゃないか。憶えてるか？」

「ああ、あの時の。 楽しかつたわ、あの頃は」

その写真は、大学の遊び仲間と海でキャンプをした時の写真だった。由美の誘いに集まつてきた仲間たちである。

「ここ」の近くのキャンプ村だ

「ここ」の近く？ ジャア、ここは……」

「そう、俺んちの別荘さ。といつても俺のじやなくて、親父の別荘だけだね」

弘一は鼻先で笑うように言つた。

「どうしてこの写真を……。片瀬さん、もしかして由美のこと……」

「そうさ、初めて会つた時から一日惚れだつたんだ。このキャンプで本氣で火が付いた。でも……言えなかつたんだ。ずっと」

「どうして？ アタックしてみればよかつたじやない。由美だつてもしかしたら……」

「知つてるんだよ。あいつには好きな男がいる」

「誰よ。私は知らないわ」

景子には思い当たる節はない。由美は心配事や相談事があれば、一番に景子に相談してくれていたのだ。

「片瀬さんの思い違ひじゃないの。好きな人がいたら私に相談してくれるはずよ」

「君には相談できないはずだ」

「どうして？」

「由美が惚れているのは、君の彼だ。信一さん、つてこうのかな  
「まさか！」

「本當だ。いつも言つてるよ」

「ハハハ、ばつかみたい。そんなの嘘よ。由美が信一さんを好きだ  
なんて」

景子は呆れるように、笑いながら言つた。

「あいつは俺には嘘は言わないよ」

「でも、それとこれとは関係ないでしょ。どうして私がこんな目に遭わなきやならないの」

「すべて俺の計画はメチャクチャだ。君のロープは解けるし、電話には飛びつくし。由美の部屋には男が一人だ。もう終わりだ」弘一は両手で頭を抱え、テーブルにゴツンゴツンと打ち当てた。

「俺は、由美が……君が……」

弘一の声は言葉にならなかつた。そして額が割れるのではないかと思うほど、テーブルに叩き付けていた。

景子はどうするともできず、ただその様子を見ていふことしかできなかつた……。

(八)

いつの間にか雨は上がっていた。いつ止んだのか誰も気が付かなかつた。

国道を走る車はワイパーを作動させずに済んだが、スピードが出ているタイヤからは、まだ水しぶきが上がっていた。今の時間、走る車の数は少ないが、それでも夜中にドライブを楽しむ若者や、荷物を運ぶ運送会社のトラックと時折すれ違っていた。

「もっとスピード出ないのか」

「そんな無茶言わないでよ」

由美は両手でしっかりとハンドルを握り、視線を正面から離さないようにして言った。

「ここで事故つたら元も子もないからな。無理に飛ばさなくていいから、慌てないで急いでくれ」

と、賢介が無茶苦茶なことを言った。

「その場所分かるのかい」

「大丈夫よ。何度も行つたことがあるもん。といつても、もう一年以上のことになるんだけどね」

由美は自分が飲酒運転だということを、全く意識していなかった。というより、これくらいの量であれば大丈夫だという自信を持つていた。

「でも本当にその別荘にいるのかな」

助手席に座つている信一が、心配そうに訊いた。

「大丈夫、間違いないわ。　海の近くって言ってたし、弘ちゃんは何かあるといつもあの別荘に一人でいるの。よく別荘からだって電話があつたわ」

由美は自信に満ちた顔で言った。

別荘というより、住宅街に立つ一軒家のよつな造りだ。ただ住宅と違うのは、建物の中にほとんど備品が置いてないところだろうか。一般的な電化製品とちょっととした調度品が置いてるだけで、広い空間を自由奔放に使える贅沢極まりない別荘だった。

裏手に廻れば砂浜の海岸が広がり、夏になれば家族連れや若者たちの恰好の行楽地と様変わりする。都会に近い別天地ともいえる場所だった。

その砂浜でキャンプを張り、みんなでバーベキューをしていた時のことを見出していた。

肉や野菜をたくさん買い込み、クーラーに缶ビールをたっぷりと冷やし、暗くなつてからの炭焼きバーベキューだ。

網の上で焼き上がる肉からは肉汁がこぼれ、辺りに香ばしい匂いを漂わせる。乾杯の後のギンギンに冷えたビールは最高に旨かつた。網焼きの肉を啄みながら、仲間たちと語り合つ。みんなの顔がほころんでいる。樂園の中の微笑みだった。

しかしそんな中、隅の方で、一人でビールを飲んでいる男がいることに、由美は気が付いた。由美は新しい缶ビールを一本、クーラーから出して男に近づいた。

「どうしたの、暗い顔して。何か悩みもあるの？」

「そんなことないよ。俺はいつもこうなんだ。心配してくれてありがとう。十分楽しんでるよ」

「そのビール無くなるころでしょ。新しいビール持つて来たわ。一緒に飲みましょ、弘ちゃん」

二人は乾杯をして缶ビールに口をつけた。そしてまた仲間とともに談笑を始めた。

「そうだ、忘れ物しちゃつたな。ちょっと行って来るから待つてくれないか。すぐ戻るから」

「行って来るって、どこまで行くの？」

「すぐ近くにうちの別荘があるんだよ」

「へえ、凄いんだ。弘ちゃんの家つてお金持ちなんだね。いいなあ」

「親父が道楽で持つてるだけだよ。俺には関係ないさ」

「私も一緒に行つてあげようか。一人じゃ怖いでしょ、本当は」

由美が悪戯つぽくそう言うと、弘一は微笑んで肯いた。

満月の明かりで白く輝いた砂浜の上を歩いている二人の後ろ姿は、いかにも仲のいい恋人同士に見えたことだろう。

別荘の外で由美は待っていた。しばらくして弘一が出て来る。手に持つているのはカメラだった。

「せつからく仲間が集まっているのに、誰もカメラ持つてきてないだろ。記念写真、撮つておかないど」

弘一はカメラを田線まで上げて、笑顔でそう言つた。

「さすが弘ちゃん、気が利くう」

由美も相好をくずし、弘一の肩をポンと叩いた。

よく考えてみれば、本当に誰もカメラを持って来ていなかつた。普通キヤンプともなれば、誰かが持つて来てもよさそうなのだが、今まで誰も気が付かなかつたのだ。

「まず一枚撮つてやるよ」

「私を？」

「これ新品のカメラなんだ。前から欲しくてね、最近やつと買ったんだよ」

「まだ使つてないの？」

「今日が初めて。このカメラの中に収めるのは、由美が第一号つてことになるな」

「私でいいのかな。カメラ壊れないかしら。あまりに美しそぎる被

写体だから」

と、由美はおどけて見せた。

「そうだな、このカメラ、ぶつたまげるかもしれないな。カメラのフラッシュより、由美の方が明るいかもな」

「どういう意味よ、それ」

ちょっとぴりのふくれつ面にあどけない笑顔。弘一を叩こうと軽く

手を上げたところで、明るいフラッシュの閃光が由美の体を包み込んだ。

「第一号、撮つたぞ」

「もう、バスに写つてたつて知らないからね」「大丈夫だよ。きつとかわいく写つてるわ」

弘一はカメラを肩に下げる、由美を促して歩き出した。林の中を通り抜け、砂浜に出た辺りで弘一が立ち止った。一步後ろを歩いていた由美は、危うく弘一の背中にぶつかるところだった。「どうしたの、急に立ち止まつて」

「由美……あのさ……」

弘一は声を詰まらせて下を向いた。  
「どうしたの？」

由美は弘一の前に回ると、心配そうにのぞき込んだ。

「いや、いいよ。何でもない」

「何よそれ。何か言いたいことがあるんでしょ。ちゃんと言つてよ」「お前さ、誰か好きな男はいるのか

「私に？　どうして？」

「いるの？　いないの？」

「さあ、どうかな。いるような、いないような。どうしてそんなこと訊くの？」

「誰なんだよ、その男」

「誰つて……。ナイショ」

人差し指を唇にあててそう言つと、「弘ちゃんは誰か好きな人いるの？」

「俺か。　いるよ。スッゲー可愛いんだよ。あれは天使だな」

「へえー、誰？　私が知ってる人？」

「由美が一番よく知てるよ」

「誰だろ？　佐代子かな、夢香かな。

もしかしたら景子じゃない

「さあ、誰かな……」

弘一は視線をそらし、黒い海を見ていた。

「景子はだめよ。あの子は純情で真面目なんだから」

「由美は純情で真面目じゃないのか？」

「私？ 私が一番純情じゃないの。まだ男の人の手も握ったことないんだから。小学校のフォークダンスは別として」

「ホントかよ。信じる奴は誰もいないと思うぞ」

「本当よ。ほら、見てよ。この可愛いモモジのような手。全然擦れてないでしょ」

由美は両手を広げて弘一の前に突き出した。

「じゃ、これも俺が第一号だな」

弘一はそう言うと、由美の手をやさしく握る。

由美の体に一瞬熱い血が駆け巡った。もちろん男の手を握るのが初めてではないことは分かつてはいるが、いつもおとなしい弘一の突然の行動に驚いたのだ。

由美の口から言葉が出なかつた。ただびっくりして、そのまま弘一の顔を凝視していた。弘一も何も言わない。時間が止まつたのではないか、と由美は思つていた。

普通のラブストーリーであれば、一人はこの後目を閉じて、自然と唇が重なり合う。そしてそのまま二人は倒れこみ……となるのであろうが、そうは問屋が卸さない。

弘一はさつと手を引くと、くるりと後ろを向いてしまつた。

「さ、行くぞ。みんな待つてるよ。それとも飲みすぎて出来上がつてるかな」

弘一はそう言つと、ゆつくりと歩きだした。しかし由美は両手を握りしめたまま、動くことができなかつた。まるでロウ人形の状態だ。

「どうしたんだよ。おいて行くぞ」

「うん……。ねえ、弘ちゃん。私の好きな人のこと訊いて、どうするつもりだったの」

「別にどうもしないよ。ちょっと訊いてみただけさ」

「それだけ？」

「由美に話したいことがあつたけど、もういいや」

「何よ、そんな中途半端な言い方はやめて。言いたいことがあるんだつたら、はつきり言つてよ」

由美は真剣な顔で語氣を強めて言つた。

弘一はゆっくりと背中を向けた。そしてしばらくの間をおいて、「その、お前が惚れた男とうまくいけばいいな。俺も何とか力になつてやるよ」と、優しい口調で言つた。

「弘ちゃん、私は……」

由美は静かに話しかけようとした。しかしその声は小さく、たまたま打ち寄せた波の音にかき消され、弘一の耳には聞こえていなかつた。

「頑張れよ。 も、行くぞ」

弘一はそう言つと、一人で先に歩き始めた。今度は後ろを振り返ることもせず、そのまま歩き続けた。

少し間隔をおいて歩いていた由美は、友人たちのグループの近くまで来ると、その輪の中でカメラのフラッシュが瞬いているのが目に映つた。

「もつ……」

由美は砂浜に落ちている石ころを蹴飛ばしながら、「つまんない

……

さう呟いて、グループの輪の中に戻つて行つたのだつた……。

## (九)

繁華街から少し離れた所、といつても住宅街やオフィス街ではなく、その中間点、境目となるような場所がある。会社の事務所もあれば、小さな商店や喫茶店、店舗兼住宅の薬局や園芸品店。もちろん一般住宅も建ち並んでいる。

そんな中に一軒の小さなスナックが入り込んでいた。カウンターに五、六人程度と四人掛けのボックスが二つ。長年この店をやっているベテランママと、三十歳くらいのホステス。そして最近アルバイトで入つて来た二十二、三歳の女の子の三人で、この店の客の接待をしていた。カウンターもボックスも、満席になることは滅多になく、三人もいれば十分な広さだ。

繁華街の中心部であれば、あと一人か二人はホステスが欲しいところだが、ここは街と町との境界線上であるため、客足は中心部より遠のいてしまうのは仕方のないことかもしれない。したがつて、料金も安めであるし、キープの値段も中心部より少し割安に設定してある。

街の騒々しい雰囲気が嫌いな酒飲みたちが数人、この店の常連となっていた。

今はカウンターに仕事帰りのサラリーマン風の男が一人、ボックスには初老の男二人連れが一組入つているだけだった。

カウンターにホステス一人、ボックスでママとアルバイトの女の子が接客していた。

入り口のドアに吊るされている鈴が鳴つて、二人連れの若い男が入つて來た。

「あら、いらっしゃい。今日は遅いのね」

と、ママ。

「いらっしゃいませ。どうちに座る？」

アルバイトの女の子がすぐに立ち上がり、二人連れに近づいて行つた。

「いたのか、悠子。今日は休みじゃなかつたのか」

「何言つてゐる。昨日がお休みだつたぢやないの。あつ、そつか、今週はまだ来てなかつたのよね、敏夫さん」

「今日はいないとつてたよ」

「あら、じゃあ私の休みを狙つて來たのね。そんなに私に会いたくなかつたの？」

悠子は意地悪く笑つて見せた。アルバイトのため、週に二三日だけこの店で働いているのである。

「今日はカウンターでいいよ。ちょっとマジな話があるんでね」敏夫はそう言つと、連れの男、竜一を促してカウンターの一番すみに腰を掛けた。

悠子は慌ててカウンターの中に入ると、温かいおしごりを出して来て二人に渡した。

「いらっしゃい。何にする？」

悠子は改めて挨拶をして、飲み物のオーダーを訊いた。

「俺のボトル、まだ入つてるか？ 無かつたら新しいのキープしてくれ」

「まだ半分くらい残つてたんぢやないかな。ちょっと待つて」

悠子は後ろを向いて、キープ棚の中から敏夫のボトルを出してきた。まだ半分以上は残つていた。

「今日は水割りしてくれ」

「あら、いつものロックぢやないの？」

「今日は酔っぱらつわけにはいかないんだ。のどを潤す程度でいい」

敏夫はそう言つと、「こいつも俺と一緒にしてくれ」と、竜一を指さして言つた。

「何だよ、俺もかよ」

「ちょっとと話があるんだ。酔う前に話をしとかないと……」

敏夫はそこまで言うと、悠子が作った水割りを一気に飲み干した。

「そんなにがぶ飲みしたら、ロックで飲むのと変わんないじゃない。

何があつたの？」

悠子は心配そうに訊いた。

「実は昨日、警察にパクられたんだよ。くそつ、あのポリ公め「パクられた、って……。敏夫さん、何やつたの？　まさか強盗とか、婦女暴行とか……」

「そんなことしたら今ここにいるわけないだろ。とっくに豚箱さ「それもそうね。でも敏夫さんなら婦女暴行とかやりそうじゃない。ははっ」

と、悠子が悪態をつきながら、「私も一杯いただくな」と言って、自分の水割りを作り始めた。

「ははっ、じやないよ、全く。駐車違反だよ」

「駐車違反？　どこに止めてたの？」

「車じやないんだよね、それが。原チャリ。五十CCCのバイクで駐車違反なんだってよ」

「原チャリで？」

「正確には駐輪違反だな。レッカー移動されてたんだ。道端に白墨で（出頭せよ）って書いてあつたよ」

敏夫はまたグラスを掴むと、今度は半分ほど飲んだ。竜一が横で笑っている。

「それで、警察には行って来たの？」

「行つて來たさ、昨日の夜中に。昼はポリ公が大勢いるだらうから、人が少ない夜中に行つたんだ。そしたら俺の相手をしたのが可愛いネーチャン。婦警だつたんだ」

「あら、よかつたじやない。その婦警さん、口説いて來たんでしょ「何が口説けるもんか、あんなお堅いネーチャン。俺がちょっと『談言つたら、スゲー怖い顔して睨みつけやがつて、散々叱られてきたよ』

「その怒った女の顔が、また可愛いんだよな」

竜二が横で笑いながら言った。

「何とか勘弁してくれってお願いしたら、後ろから人相の悪いボリ公が近づいて来て、俺のこと睨んでたよ。あれはきっとボリ公の制服を着たヤクザだぜ」

「さすがの敏夫さんも、警察にはかなわないみたいね」

「当たり前じゃないか。罰金とレッカー代でしめて一萬一千円。ヤケ酒代も含めると約三万円の損だな。もつたいねえなあ」

「もつたいないのはヤケ酒の方でしょ。でもまあ、そのおかげで私もおいしいお酒をいただいてるけどね」

悠子はグラスに残っている水割りを一気にあけると、一杯目の水割りを作り始めた。

また入口の鈴が鳴った。三人連れの客が入つて来る。そして女の子たちの挨拶を受けながら、空いているボックス席に座つた。

「悠子ちゃん、お客様よ」

と、ママの声が聞こえて来た。どうやら悠子のなじみの客のようである。

悠子は温かいおしぶりを手に持つて、ボックス席に近づいた。  
「いらっしゃい。久しづりじゃないですか」

と挨拶しながら、そのボックスに座り込んだ。

その様子をカウンターの隅で見ていた敏夫は、フッと小さな溜息をついて、空になつたグラスに自分で水割りを作り始めた。

「あら、じめんなさい、敏ちゃん」と、ママが気を配つた。

「俺たちも話があるから、こつちは構わなくていいよ」

敏夫はママに向かつて言つた。しばらくは誰も俺たちの前には来ないだらう、と周りを確認すると、竜二の方に向かつて姿勢を直した。

カウンターの先客とは少し距離がある。ボックスの方にも、スペースは狭いが、敏夫たちとの間にアンティークな置物が置いてあり、

どちらも座つていればお互の姿は消えてしまう。

敏夫は何かから話したものか、と思いながら水割りを飲んでいると、竜一の方から小声で話しかけてきた。

「あいつ本当に大丈夫だろうな。何かとんでもないことしかすんじゃないかな」

「俺が話したかったのは、そのことなんだ」

「大雑把にしか話を聞いていなかつたけど、お前は事情を知つてるんだろ」

二人は周りの目を気にしながら、ヒソヒソと話し続けた。

「知らない割には、お前の演技力も大したもんだよ。あの女、本当にビビつてたもんな」

「そりやビビるよ。知らない三人組の男たちに拉致されるんだ。普通ならションベンちびっちゃうぜ」

「実はそのことでお前に話がある。あのな」

敏夫と竜一。この二人、景子を拉致した時の、片瀬弘一に加担した二人組である。

最初に景子の腕をつかんで話しかけたのが竜一。あのスポーツマンタイプのがつしりとした体格である。そして後から出てきて景子に脅しをかけていた、あの目つきの悪い男が敏夫だったのだ。弘一とこの二人の出会いは、まだ最近のことだった。

弘一は金持ち社長の一人息子だが、父親の会社には入らず、勝手気ままに転職を繰り返していた。しかしどこに行つても長続きせず、昼の仕事や夜の仕事、植木屋に行つたかと思えばショットバーのバーテンをやってみたり。

夜はいつも町をふらつき、いろんな店へと出入りしていた。

そして弘一が出入りしていたミニクラブで、よく顔を合わせる客同士ということで、約半年前に知り合つたのがこの二人だった。特に弘一と敏夫は、それから一人で飲み歩く機会が多くつた。どちらも物静かで、やたらと騒ぐようなタイプではない。どことなく一匹狼タイプなのだが、一人でいると、なぜか一匹オオカミという言葉

さえぴたりくるような雰囲気があつた。ただこの一人は、お互に何を考えているのか分からない、怖い雰囲気さえ持っていた。

竜一は敏夫の学生の頃からの友人である。お人好しで、何でも頼まれるといやとは言えない性格だ。今回の拉致事件にしても、大変なことにはならないから、といふことで、この肉体に景子の拉致を委ねられていたのである。

そしてわけが分からぬまま、今この店で敏夫から話を聞くつと思つていたところだつた。

「あいつ、死ぬぜ」

「誰が？」

「弘一だよ。片瀬弘一」

敏夫の意外な言葉に、竜一は声を失つた。

「あいつ、最初っから死ぬ気だつたんじやないかな」

「ちょっと待てよ。それじゃ話が違うじゃないか。誰も傷つけることはないつて、最後は丸く治まるつて……。そうじやなかつたのか」「すべて丸く治まるさ。すべてね」

「あの女は？　あの景子つていう女。あの子はどうなるんだよ」

竜一はそんな事情があるとは知らず、人助けのつもりで加担していたのだ。それがこんなことにならうとは、詳しく聞かずに加わつたことを後悔していた。

「残念だが、あの女も道連れだ。でもそれでいいんだよ。すべて丸く治まるんだから」

「どういうことだか説明してくれないか。俺は殺人に手を貸すつもりはないぞ」

「心配するな。俺たちは何もやつちゃいないんだから。すべて弘一が一人でやつしたことになつていてる。　あいつ、悩んでたんだ」

「何を。仕事か、金か、女か」

「全部。あいつは人生のすべてに行き詰つてたんだ。仕事も定職につけず、親からも見放されてる。女にもろくに話もできないし、友達だって少ないんじゃないかな」

「だつたらお前と変わらないじゃないか」

「俺はいいんだよ。俺はいつだって能天氣だし、樂天家だからな。でもあいつは違う。一人で悩んでどんどん落ち込んでいく。誰も助ける奴はない。 ただ、惚れている女がいるんだが、あいつは指をくわえて見ているだけなんだ」

「誰だよ」

「さつき俺が電話してた由美って女さ」

「だからその由美と信一が弘一の別荘に行つて、四人で話し合い、そして円満に解決。ということじやなかつたのか」

竜一は興奮気味にそう言つと、グラスをドンとカウンターに叩き付け、敏夫に詰め寄つた。店の中にいた客やホステスたちが、一斉に振り向いた。

「あ、ごめんごめん。何でもないんだ。気にしないでくれ」

敏夫は周りにそう言つと、「でかい声出すんじゃないよ。お前も殺人犯になりたいのか」

そう言つて、また水割りを飲み始めた。

「お前、そんな奴だつたのか」

「由美は信一に惚れてるんだ。信一だつて分かりやしないよ。景子の友達だから言えないだけかもしれない。弘一は所詮片思いなんだよ。その弘一が最後にできることは、自分が惚れた女が幸せになることなんだ」

「だから?」

竜一の額に汗が浮かんでいた。敏夫の言つことが、まだ理解できないのだ。そして竜一の頭の中には、魔の手から逃れようとする景子の歪んだ顔が見え隠れしていた。

「どつちにしても弘一は自殺しようとしているんだ。そこで景子は道連れ。後に残つた信一と由美が、もしかしたらうまくまとまるかもしれない」

「そんなんうまくいくもんか。なぜ二人が死んでしまつたのか、分からぬだろ」

「だから俺がいるんだよ。弘一と景子は、実はできてたんだ、と信二と由美に伝える。そうすれば二人とも騙されたと思い込むだろう。後は一人にお任せ。どうなつたって俺の知ったことじゃない」

敏夫は冷淡な口調で言った。時には薄ら笑いさえ浮かべながら。

「知ったことじやないつて、お前、弘一を助けたいと思わなかつた

のか。友達じやなかつたのかよ」

「あいつは死んだ方がいいんだよ。それがあいつのためだ。生きていたつてしようがないんだよ」

「俺、今から行ってくる」

竜一は立ち上がり、セカンドバッグを取り上げると、そのまま歩き出そうとした。敏夫は慌てて竜一の腕をつかむ。

「行つて来るつて、どこに行くんだよ」

「別荘に決まつてるじやないか。あいつらを助けに行くんだよ」

「やめろよ、もう遅いかもしれん。弘一は拳銃持つてるんだ」

「拳銃？ 何であいつがそんな物持つてるんだ」

「あいつは大企業の息子さ。親父のコネを使えば、何だつて手に入るんだよ」

敏夫は数日前に、弘一から自殺をほのめかす話を聞いているとき、バッグの中から拳銃を取り出して見せていたのである。もちろん入手先は明らかにしなかつたが、大企業ともなれば、暴力団と何らかの関係ができるいるらしい。自分が本当に欲しいものは手に入らないが、こうじうものであれば何だつて手に入るもんさ、と自慢していたのだ。

「まずその拳銃で景子をズドン。そして別荘に火をつける。最後に景子の横で自分の頭をズドン。 それですべておしまいさ」

「まだ終わつたわけじやないだろ？ 生きているかもしれん。とにかく俺、行ってみる。お前との付き合いもこれで終わりだ。あばよ」

竜一の憤怒ぶりは尋常ではなかつた。カウンターに置いてあつた自分のグラスを敏夫の前で叩き割ると、あつという間に店を飛び出

して行つた。そして店の前に停まつてゐる客待ちのタクシーに乗り込み、運転手に行き先を告げた。

タクシーが発進するのとほぼ同時に、店の中から敏夫が飛び出して來た。しかしタクシーを止めることはできず、車は走り去つてしまつた。

「どうしたの、敏夫さん。何かあつたの？」

店の中から悠子が飛び出して来て言った。

「くそ、あの野郎。あいつはあんな正義の味方じゃなかつたはずだ。良い子ぶりやがつて」

「ケンカしたの？」

「何でもないよ。今日の飲み代はつけといてくれ。ママによろしくな」

敏夫はそう言つと、近くの駐車場まで走つた。自分の車で來ていたのだ。もちろん飲酒運転など関係ない。いつものことだ。

竜一に先に着かれては、面倒なことになる。まだ自分の話を最後までしていなかつた。もし全員が助かることになると、自分の立場が不利になることは明白だつた。早く行って竜一に追いつかなければならぬ。

敏夫は駐車場から車を出すと、猛スピードで竜一を追いかけたのだった……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6925w/>

---

懲悔～Z A N G E～

2011年10月7日03時23分発行